

<実践報告>

運動に対する愛好的態度と運動有能感を育む体育指導についての考察
一定時制高等学校における「運動の日常化」を目指した実践を通して

藤田育郎 信州大学学術研究院教育学系スポーツ科学教育グループ
齋藤美香 長野県野沢南高等学校
酒井拓也 長野県軽井沢高等学校

A Study on the Attitude toward Physical Education and Sport
Competence in Physical Education Classes

FUJITA Ikuro: Sports Science Education, Institute of Education, Academic Assembly,
Shinshu University

SAITO Mika: Nozawa-minami High School

SAKAI Takuya: Karuizawa High School

研究の目的	定時制高等学校の生徒を対象に実施した運動指導の成果を「運動に対する愛好的態度」と「運動有能感」の育成という両側面から検討することを通して、よりよい体育指導の在り方についての知見を得ること。
キーワード	愛好的態度 運動有能感 運動の日常化
実践の目的	運動に対して消極的な生徒たちに配慮した運動プログラムを経験させることによって、「運動に対する愛好的態度」と「運動有能感」を育むとともに、「運動の日常化」の意識を芽生えさせること。
実践者名	第一、第三著者と同じ
対象者	長野県立N高等学校定時制1~4年生(68名)
実践期間	2013年10月
実践研究の方法と経過	定時制高等学校の生徒たちの実態に配慮した運動プログラムを作成し、その成果を「診断的・総括的授業評価」および「運動有能感測定尺度」の両側面から明らかにした。加えて、生徒たちが運動指導実施後に記した自由記述アンケートを分析した。
実践から得られた知見・提言	実施した運動指導は、事前アンケートで中位・下位群に位置していた生徒たちから肯定的に受け止められているという結果を得た。また、運動指導の実施にあたって筆者らが望んでいた成果を概ね得ることができたといえる。これらには、集団的達成に根差した活動の中で、生徒たちが新しい運動と出会い、個々の進歩を実感する経験が有効に機能しているということが示唆された。

1. はじめに

中央教育審議会答申(2008)では、体育科、保健体育科における課題として「運動する子どもとそうでない子どもの二極化」、「運動への関心や自ら運動する意欲、各種の運動の楽しさや喜び、その基礎となる運動の技能や知識など、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の育成が十分に図られていない例もみられること」などを挙げている。一方、学習指導要領では、小・中学校では「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力(の基礎)を育てる」こと、高等学校では「生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を育てる」ことが教科の目標に示されており、生涯スポーツを志向した指導の充実が学校体育には一貫して期待されている(文部科学省, 2008a, 2008b, 2009)。

生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の1つの側面として、「運動に対する愛好的態度」が挙げられるが、この「運動に対する愛好的態度」は、体育科の目標構造から解釈することができる。つまり、運動(技能)目標、認識目標、社会的行動目標、それらが相互に関係し合い、運動を楽しんだり、好きになったりといった常に目指されるべき情意目標へと通じていく。一方、最終学歴以降も生涯にわたって豊かなスポーツライフを築いていくためには、運動に対して内発的に動機づけられることも必要であるといえよう。岡沢・三上(1998)は、運動に対して内発的に動機づけられるためには、「運動有能感」を高めることが有効であるとしている。この「運動有能感」とは、「身体的有能さの認知(運動技能に対する自信)」、「統制感(努力すればできるようになるという自信)」、「受容感(教師や仲間から受け入れられているという自信)」という3つの要素から構成される概念である(岡沢ほか, 1996)。

本実践報告は、定時制高等学校において「運動の日常化」を意図して実施した運動指導の成果を「運動に対する愛好的態度」と「運動有能感」の両側面から明らかにすることを目的としたものである*。生涯スポーツの始まりをすぐそこに控えた高等学校段階において実践した運動指導の成果から、生涯スポーツを志向したよりよい体育授業の在り方に関する知見が得られるものと考えられる。

2. 実践の概要

2.1. 期日・対象

平成25年10月に、長野県立N高等学校定時制に在籍する1~4年生(各学年1クラス)の生徒、計68名を対象に各学年2回の運動指導を実施した。

2.2. 生徒の実態

N高等学校定時制の保健体育科教諭および養護教諭によれば、体育の時間になると保健室へ行く生徒や怪我・体調不良以外の理由で授業を見学する生徒がおり、授業(運動)に対する意欲が高くなく、苦手意識を持った生徒も多くいるとのことであった。また、その

* 本稿は、藤本(2014)を加筆・修正したものである。

ような事情から通常の体育の授業では、何かしら特定の運動種目を取り上げずに、生徒が行いたい運動を選択して行わせることもあるとのことである。N高等学校定時制の保健体育科教諭および養護教諭との事前の打ち合わせから、運動実施にかかわる生徒たちの実態は、以下の点に集約された。

- ①運動の日常化（学習した運動を授業以外の場面に活かすこと）に課題があること
- ②身体接触を伴う運動を敬遠する傾向にあること
- ③人と関わることやコミュニケーションを苦手とする生徒が少なくないこと
- ④競争性の高い（勝敗が明確になりすぎる）運動を敬遠する傾向にあること

2.3.指導内容作成上の留意事項

以上のような生徒の実態に配慮しながら、運動指導のプログラムを作成することとした。授業（運動）に対する意欲が高くなく、苦手意識を持った生徒も多くいるといったことを前提条件としながら、上記した①～④の実態に応じて留意した事項は、以下に示すとおりである。

- ①身近な用具を用いること、新しい運動に出会わせること

授業で学習したことを休み時間や放課後等においても取り組んでもらうことを意図し、身近な用具を用いるという視点から、生徒たちに馴染みの深いであろうなわとびを取り入れた。また、新しい運動に出会わせるという視点では、バランスボールを用いた運動を取り上げた。

- ②物体を介した他者との接触からスタートすること

なわとびやバランスボールを使用し、物体を介して他者と接触する活動からスタートし、最終的には、直接の身体接触（他者と手を取り合う、他者の体を支える）を伴う活動を取り入れるようにした。

- ③課題に取り組む人数を次第に増やしていくこと

少人数で行う活動からスタートし、次第に人数が増えていく活動となるように内容を構成した。特に、課題の解決にあたって、他者と息を合わせたり、声を掛け合ったりすることが求められる集団的達成に根差した活動を取り入れた。

- ④個々の進歩を強調した課題を設けること

個人あるいは集団で競い合う課題は取り入れず、集団的達成を意図した課題に取り組みながら、ペアやグループ内でどれだけできるようになったか、それぞれの進歩に意識が向くように内容を構成した。

2.4.運動指導の内容

上記した留意事項に基づき、第1回目の運動指導ではなわとびを、第2回目の運動指導ではバランスボールを用いた運動を取り上げることとした。なお、具体的な指導内容については、岡田（2005）、近江（2011）、池田・長谷川（2011）を参考に考案した。指導内容および先述した留意事項に基づく内容構成の意図は、表1に示したとおりである。また、実際の運動指導の様子は、図1に示したとおりである。

表1 運動指導の内容と内容構成の意図

運動指導第1回目 (なわとび)	
指導内容	<p>①トラベラー【6～7人】 なわとびを持った人が跳びながら、横一列に並んだ状態でジャンプしている人たちを順番に跳ばせていく。</p> <p>②回し手2人トラベラー(跳び手なし)【6～7人】 回し手2人がなわを回しながら、横一列に並んだ状態でジャンプしている人たちを順番に跳ばせていく。</p> <p>③回し手2人トラベラー(跳び手あり)【6～7人】 回し手2人がなわを回して1人を跳ばせながら、横一列に並んだ状態でジャンプしている人たちを順番に跳ばせていく。</p> <p>④ダッシュなわとび【10～12人→クラス全員】 縦一列に並んだ人たちを、回し手2人が走りながらなわを回し、順番に跳ばせていく。</p> <p>⑤トラベラーに再チャレンジ【5～6人】 なわとびを持った人が跳びながら、横一列に並んだ状態でジャンプしている人たちを順番に跳ばせていく。</p>
内容構成の意図	<ul style="list-style-type: none"> ・課題を変えながら、同じような活動に発展的に取り組めるようにした(①→②→③)。 ・直接的な身体接触を設けず、活動する人数が次第に増えていく構成とした。 ・最初に行った課題を再チャレンジという形で最後に設けることによって、グループの進歩を確認できるようにした。 ・終盤には、クラス全員で1つの課題にチャレンジする場面を設けた。
運動指導第2回目 (バランスボール)	
指導内容	<p>⑥ボール慣れ【2人】 バウンドパス、背面パス、股下パス、ボールくぐり、バウンドキャッチ(手・足・腹・背中)</p> <p>⑦クルクル回転【2人】 対面してお腹にボールをはさむ。「せーの！」のかけ声に合わせて、お互いの体にボールをはさんだまま落とさないように1回転する。</p> <p>⑧自転と公転【2人】 対面してお腹にボールをはさむ。1人は動かずに、もう1人は相手の周りをボールが落ちないように、お互いの体にボールをはさんだまま1周する。</p> <p>⑨バランス列車【2人→4人→8人】 2人組でお腹と背中にボールをはさんで前進する。「せーの！」のかけ声に合わせて、同じ方向に180度回転し、進行方向を変えて前進する。2人→4人→8人と人数を増やしていく。</p> <p>⑩スーパーマン【4人】 1人がボールの上に腹ばいになり手足を浮かせる。手足を残り3人で持ち、「せーの！」のかけ声に合わせて右方向に移動し、右隣の仲間が持っていた手足を、地面に着く前に持つ。</p> <p>⑪集団バランス【2人→4人→8人→クラス全員】 手をつないでボールに座り、相手のボールに足を乗せる。2人→4人→8人→クラス全員と人数を増やし、どうすればバランスを取れるか、仲間と考えながら行う。</p>
内容構成の意図	<ul style="list-style-type: none"> ・課題の解決にあたって、他者と息を合わせたり、声をかけ合ったりすることが求められる活動を中心的な内容とした。 ・前半は直接的な身体接触を設けず、後半に他者と手を取り合ったり、体を支えたりすることが必要となる課題を設定した。 ・最後には、クラス全員で1つの課題にチャレンジする場面を設けた。



ダッシュなわとび



ダッシュなわとび (クラス全員で)

トラペラー

集団バランス

図1 運動指導の様子

2.5.アンケートの内容

運動指導の実施前後に、高田ほか(2000)によって作成された診断的・総括的授業評価(表2)と岡澤ほか(1996)によって作成された運動有能感測定尺度(表3)を用いてアンケートを行った。また、運動指導後に、運動に対する意識の変容を問う自由記述式のアンケート(表4)を行った。なお、アンケート調査用紙への記入が不備であった生徒と2度の運動指導に不参加であった生徒を除いた51名を有効な分析対象者とし、これらのアンケートは個人が特定されることのないように無記名で行うとともに、学校側の了承を得て行った。

表2 診断的・総括的授業評価

体育の授業について、あなたの考えに最もあてはまるものに○をつけてください。
3:はい 2:どちらでもない 1:いいえ

情意目標 【たのしみ】	1 体育では、みんなが楽しく勉強できる。	3・2・1
	2 体育は、友達と仲良くなるチャンスだ。	3・2・1
	3 体育では、体が丈夫になる。	3・2・1
	4 体育では、精一杯運動することができる。	3・2・1
	5 体育で体を動かすと気持ちがいい。	3・2・1
認識目標 【まなぶ】	6 体育では、自分の動きを工夫しながら学習している。	3・2・1
	7 体育では、上手な人を見本として取り組むことがある。	3・2・1
	8 体育で運動するときは、目標を立てて取り組む。	3・2・1
	9 体育で習った運動を自分で練習することがある。	3・2・1
	10 体育では、友だちや先生が励ましてくれる。	3・2・1
運動目標 【できる】	11 運動が上手にできる方だ。	3・2・1
	12 練習すれば難しい運動もできるようになる。	3・2・1
	13 体育では、自分から進んで運動する。	3・2・1
	14 体育が始まる前は、いつもはきっている。	3・2・1
	15 体育では、色々な運動が上手にできるようになる。	3・2・1
社会的行動目標 【まもる】	16 体育では、いざ知らず自分勝手な行動はしない。	3・2・1
	17 体育では、クラスやグループの決まりを守る。	3・2・1
	18 体育では、教師の話や指示をしっかりと聞く。	3・2・1
	19 ゲームや競争をするときは、ルールを守る。	3・2・1
	20 ゲームや競争をするときは、正々堂々と取り組む。	3・2・1

表3 運動有能感測定尺度

体育の授業について、あなたの考えに最もあてはまるものに○をつけてください。
5:あてはまる 4:ややあてはまる 3:どちらでもない 2:あまりあてはまらない 1:あてはまらない

身体的有能さの認知	1 運動能力がすぐれている方だ。	5・4・3・2・1
	2 たいいの運動は上手にできる。	5・4・3・2・1
	3 運動の上手な見本として、よく選ばれる。	5・4・3・2・1
	4 運動について自信を持っている方だ。	5・4・3・2・1
統制感	5 練習をすれば、運動は必ず上達すると思う	5・4・3・2・1
	6 努力すればたいいの運動は上手にできると思う。	5・4・3・2・1
	7 少し難しい運動でも、努力すればできると思う。	5・4・3・2・1
	8 できない運動も練習すればできるようになると思う。	5・4・3・2・1
受容感	9 運動をしている時、教師から励ましの声がある。	5・4・3・2・1
	10 運動をしている時、友達から励ましの声がある。	5・4・3・2・1
	11 一緒に運動する友達がいる。	5・4・3・2・1
	12 一緒に運動をしようと誘ってくれる友達がいる。	5・4・3・2・1

表4 自由記述式のアンケート

①今回の運動指導で印象に残ったのはどのような運動ですか。またその理由を記述して下さい。

②今回の運動指導を経験して、運動に対するイメージがどのように変化したか具体的に記述して下さい。

③今回の運動指導を経験して、これからどのようなことに気を付けて運動に取り組んでいこうと思いますか。

3. 結果と考察

3.1. 運動に対する愛好的態度からみた運動指導の成果

表5は、運動指導前における「診断的・総括的授業評価」の総合得点を基に分析対象者を上位・中位・下位の3群に分類し、各群における運動指導前後の得点をt検定によって比較した結果を示したものである。

表5 「診断的・総括的授業評価」の得点の変容

群	因子名	指導前		指導後		t値
		MEAN	(S.D.)	MEAN	(S.D.)	
上位群 (n=16)	情意目標	13.31	(1.56)	13.88	(1.19)	-2.666 *
	認識目標	12.33	(1.37)	12.42	(1.57)	-0.220
	運動目標	11.44	(2.15)	12.14	(2.13)	-2.467 *
	社会的行動目標	13.55	(1.44)	13.36	(1.86)	0.430
	合計得点	50.63	(4.52)	51.80	(5.29)	-1.248
中位群 (n=17)	情意目標	11.56	(1.84)	12.31	(1.13)	-2.244 *
	認識目標	8.82	(1.71)	9.66	(1.78)	-2.852 *
	運動目標	8.87	(1.93)	8.82	(1.67)	0.169
	社会的行動目標	12.00	(2.02)	12.22	(1.98)	-0.420
	合計得点	41.25	(1.93)	43.01	(3.92)	-2.233 *
下位群 (n=18)	情意目標	8.25	(2.72)	9.63	(2.35)	-2.516 *
	認識目標	5.92	(1.70)	7.54	(1.86)	-3.244 **
	運動目標	6.58	(2.62)	7.92	(2.23)	-2.803 **
	社会的行動目標	9.42	(2.96)	10.71	(2.16)	-2.385 *
	合計得点	30.17	(6.87)	35.79	(6.06)	-3.508 **

(* p<.05 ** p<.01)

上位・中位・下位群において、情意目標の得点に有意な向上がみられた。具体的な質問項目に目を向けると、すべての群に共通して「体育では、みんなが楽しく勉強できる」の項目が大きく得点を伸ばしていた（上位群：2.44→2.72，中位群：2.21→2.38，下位群：1.75→2.13）。したがって、今回実施した運動指導は、各群の生徒たちが共存しながら十分な楽しさを味わえるものであったと考えられる。

認識目標、運動目標、社会的行動目標においては、上位・中位・下位群で異なる傾向がみられた。上位群では、運動目標の得点に有意な向上がみられ、具体的な質問項目に目を向けると、「練習すれば難しい運動もできるようになる」の項目が大きく得点を伸ばしていた（2.06→2.34）。また、中位群では、認識目標の得点に有意な向上がみられ、具体的な質問項目に目を向けると、「体育では、上手な人を見本にして取り組むことがある」の項目が大きく得点を伸ばしていた（1.77→2.03）。今回実施した運動指導は、運動に対する意欲が高くなく、苦手意識を持った生徒たちに特に配慮した内容であったが、上位群の生徒たちにとっても成功体験を味わえる機会が十分にあった内容であったと捉えることができる。また、他者と息を合わせたり、声をかけ合ったりするを通じた集団で課題解決に取り組む活動を中心としたことによって、友人を見本にしながら取り組むといった思考を育成することにも迫ることができたといえよう。

一方、下位群では、すべての因子において有意な向上がみられた。具体的な質問項目に目を向けると、認識目標では「体育で習った運動を自分で練習することがある」の項目が大きく得点を伸ばしていた（1.08→1.50）。今回の運動指導では、なわとびという身近な用

具を用いるとともに、新しい運動に出会わせることを意図してバランスボールを用いた運動を取り入れ、「運動の日常化」の意識を芽生えさせることを主たるねらいとしていた。各学年2回だけの指導であったために、それが定着したとは考えづらいが、授業で学習したことを授業外の場面にも活かしていくという意欲を持たせる契機になり得たと考えられる。また、運動目標では「練習すれば難しい運動もできるようになる」(1.33→1.92)、社会的行動目標では「体育では、教師の話や指示をしっかりと聞く」(1.75→2.29)の項目が大きく得点を伸ばしていた。教師の指導の下で学習に従事する中で多くの成功体験を得られたことが、下位群に位置していた生徒たちの運動に対する意欲の向上に貢献していたものと考えられる。

3.2.運動有能感からみた運動指導の成果

表6は、運動指導前における「運動有能感測定尺度」の総合得点を基に分析対象者を上位・中位・下位の3群に分類し、各群における運動指導前後の得点をt検定によって比較した結果を示したものである。

表6 「運動有能感測定尺度」の得点の変容

群	因子名	指導前		指導後		t値
		MEAN	(S.D.)	MEAN	(S.D.)	
上位群 (n=16)	身体的有能さの認知	13.91	(2.99)	14.69	(3.31)	-1.297
	統制感	17.27	(2.42)	17.27	(2.47)	0.000
	受容感	15.78	(3.06)	15.78	(3.32)	0.000
	合計得点	46.95	(4.94)	47.73	(6.33)	-0.656
中位群 (n=16)	身体的有能さの認知	9.50	(2.21)	10.83	(2.94)	-2.477 *
	統制感	13.67	(2.19)	14.75	(2.60)	-2.827 **
	受容感	13.58	(3.37)	14.00	(3.31)	-1.234
	合計得点	36.75	(1.69)	39.58	(3.36)	-3.336 **
下位群 (n=19)	身体的有能さの認知	6.12	(2.16)	6.84	(2.58)	-1.568
	統制感	8.82	(3.27)	10.39	(3.56)	-2.230 *
	受容感	11.12	(4.02)	12.57	(3.02)	-2.900 **
	合計得点	26.05	(6.17)	29.80	(6.50)	-2.538 *

(* p<.05 ** p<.01)

中位群と下位群において、統制感の得点に有意な向上がみられた。具体的な質問項目に目を向けると、両群に共通して「努力すればたいの運動は上手にできると思う」の項目が大きく得点を伸ばしていた(中位群:3.33→3.83, 下位群:2.11→2.57)。加えて、下位群では、受容感の得点に有意な向上がみられた。具体的な質問項目に目を向けると、「運動をしている時、友達から励ましの声がある」の項目が大きく得点を伸ばしていた(2.37→2.83)。第1回目の運動指導では、競争性の高い運動を敬遠する傾向にあるといった生徒たちの実態に配慮し、最初に行った課題を再チャレンジという形で最後に設けることによって、グループの進歩を確認できるようにした。また、第2回目の運動指導では、新しい運動に出会わせるという視点からバランスボールを用いた運動を取り上げ、他者と息を合わせたり、声をかけ合ったりすることによる課題解決が望める内容とした。運動に対してなかなか自信を持たずにいる生徒たちにとっては、このような側面からの手立てが有効に機能するものといえよう。

一方で、上位群では、3つの因子すべてにおいて目立った変容がみられなかった。運動に対して自信を持つ者とそうでない者が混在するクラス集団の中で、すべての生徒たちが「努力すればできるようになる」という見通しを持ち、「教師や仲間から受け入れられている」という実感を持ちながら、「運動技能に対する自信」を深めていくことができる体育指導の在り方を追究することが、今回実施した運動指導に残された課題であるといえる。

3.3.運動に対する意識の変容からみた運動指導の成果

表7は、運動指導後に実施した自由記述アンケートにおける記述内容をカテゴリーに分類し、記述数が多かった上位3項目について、実際の記述例（原文のまま）とともに示したものである。

表7 自由記述アンケートの集計結果と記述例

質問項目	カテゴリー	記述数	記述例
印象に残った運動とその理由	新しい運動の経験	10	バランスボールがとてものしかったです。今まではバランスボールはひとりでのものだとおもっていましたが、今回いっしょにできてたのしかったです。
	仲間との協力	8	なわとびもバランスボールもとても印象に残っています。なわとび・バランスボール、仲間とのれんけいが大切な気がしました。とても楽しかったです。
	課題の達成	7	なわとびが楽しかった。むずかしかったけど、さいごにはいざいできた！
運動に対するイメージの変化	苦手意識の変容	9	運動ってきびしいものでなく楽しいんだと思った！なわとびは苦手だったけど、すこしづつ好きになれた。
	運動の行い方	8	今までの運動はくらべ合うというイメージしかなかったのですが、今回はみんなで遊ぶ感覚でできておもしろかったです。
	協力の重要性	6	積極的にたのしくまわりの人たちと取りくむことがたいせつだと学びました。
運動をする上で気をつけたいこと	健康・安全への配慮	11	健康のことを考えながら、ケガしないように無理をせず動く。
	授業外の運動実施への意欲	8	定期的に運動する時間を作り、色んな運動にも挑戦してみたいと思います。
	仲間との協力	7	みんなと運動するのは、にがてですが、なるべく積極的に体をうごかし取りくみたいです。

○印象に残った運動とその理由

「新しい運動の経験」、「仲間との協力」、「課題の達成」のカテゴリーに分類された記述が上位を占めていた。今回実施した運動指導では、「運動の日常化」の意識を芽生えさせることを主たるねらいとし、新しい運動に出会わせるということを意図して指導内容を構成した。加えて、競争性の高い運動を敬遠する傾向にあるといった生徒たちの実態に配慮し、最初に行った課題を再チャレンジという形で最後に設けることによって、グループの進歩を確認できるように内容を構成した。他者と息を合わせ、声をかけ合いながら課題解決に取り組む集団的達成をベースとした活動にこれらの視点を組み込んだ指導内容であったが、運動指導の実施にあたって筆者らが望んだ成果と生徒たちが経験した運動指導に対する印象が概ね合致したものになったといえるだろう。

○運動に対するイメージの変化

「苦手意識の変容」、「運動の行い方」、「協力の重要性」のカテゴリーに分類された記述が上位を占めていた。今回実施した運動指導は、運動に対する意欲が高くなく、苦手意識

を持った生徒たちに特に配慮した内容であったが、「苦手意識の変容」に分類された記述が多くみられたことは、一定の成果が得られたといえよう。また、「今までの運動はくらべ合うというイメージしかなかった」という記述にみられるように、今回の運動指導の経験を通して、運動を新たな側面から捉える視点を持てたことも、運動に対して苦手意識を有していた生徒たちにとって有効に機能したと考えられる。

○運動をする上で気をつけたいこと

「健康・安全への配慮」、「授業外の運動実施への意欲」、「仲間との協力」の категорияに分類された記述が上位を占めていた。今回実施した運動指導では、「運動の日常化」の意識を芽生えさせることを主たるねらいとしていたが、「授業外の運動実施への意欲」に分類された記述が多くみられたことは、一定の成果が得られたといえよう。学習した運動を授業以外の場面に活かすことや生涯にわたって豊かなスポーツライフを築いていくことには、体育科の目標構造における情意目標が大いに関連している。先の2つの質問項目において、「仲間との協力」、「課題の達成」、「運動の行い方」といった categoriaに分類された記述が多くみられたことを鑑みると、社会的行動目標、運動（技能）目標、認識目標、それぞれが相互に関係し合いながら、運動を楽しんだり、好きになったりといった常に目指されるべき情意目標へと通じていくということが改めて確認できる結果となった。

4. おわりに

本実践報告は、定時制高等学校において「運動の日常化」を意図して実施した運動指導の成果を明らかにすることを目的としたものであった。授業（運動）に対する意欲が高くなく、苦手意識を持った生徒も多くいるといったことを前提条件としながら、生徒たちの実態に配慮して作成した運動プログラムの成果を検討した。その結果、運動指導前に実施したアンケート調査において、「運動に対する愛好的態度」と「運動有能感」ともに、中位・下位群に位置していた生徒たちから今回実施した運動指導が肯定的に受け止められているという結果を得ることができた。また、運動指導後に実施した運動に対する意識の変容を問う自由記述式のアンケートからは、運動指導の実施にあたって筆者らが望んでいた成果を概ね得ることができたと考えられた。これらのことには、他者と息を合わせ、声をかけ合いながら課題解決に取り組む集団的達成に根差した活動の中で、生徒たちが新しい運動と出会ったり、個々の進歩を実感できたりする経験が有効に機能しているということが示唆された。

今日、学校体育に一貫して期待されている生涯スポーツを志向した指導の充実という視野に立てば、生涯スポーツの入口をすぐそこに控えた高等学校段階における体育指導のより一層の充実が必要となるといえよう。本実践報告では、先述したアンケート調査において上位群に位置していた生徒たちには、望ましい成果がみられなかった。「運動に対する愛好的態度」と「運動有能感」ともに、様々なレベルの生徒が混在するクラス集団の中で、どの生徒たちもそれらを高めていくことができる、延いては生涯にわたって豊かなスポー

ツライフを継続していくための資質や能力を育んでいくことができる高等学校段階における体育指導の在り方について、今後も検討を重ねていきたい。

文献

中央教育審議会，2008，幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）。

藤本優，2014，運動に対する愛好的態度及び運動有能感を育む体育授業のあり方に関する一考察—一定時制高等学校における運動指導を通して—，信州大学教育学部卒業論文。

池田延行，長谷川聖修，2011，乗って，弾んで，転がって！ちゃれんGボール，明治図書出版，東京。

文部科学省，2008a，小学校学習指導要領解説 体育編，東洋館出版社，東京。

文部科学省，2008b，中学校学習指導要領解説 保健体育編，東山書房，京都。

文部科学省，2009，高等学校学習指導要領解説 保健体育編 体育編，東山書房，京都。

岡田弘道，2005，仲間とのかかわりが学習活動の充実につながる，体育科教育59（9），pp.40-43。

岡沢祥訓，北真佐美，諏訪祐一郎，1996，運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研究，スポーツ教育学研究16（2），pp.145-155。

岡沢祥訓，三上憲孝，1998，体育・スポーツにおける「内発的動機づけ」と「運動有能感」との関係，体育科教育46（1），pp.47-49。

近江望，2011，「コンビネーションなわとび」を提案する，体育科教育59（9），pp.39-43。

高田俊也，岡沢祥訓，高橋健夫，2000，態度測定による体育授業評価法の作成，スポーツ教育学研究20（1），pp.31-40。

（2014年6月30日 受付）